

糖尿病のチーム医療

ー多職種協働でのチーム医療を実感してー

医療法人社団 和楽仁 芳珠記念病院 糖尿病看護認定看護師 東 康子

患者さんを中心にした、多職種協働のチーム医療の提供が重要視されています。専門性を生かした多角的な指導や支援が必要な糖尿病患者さんにとって、チーム医療は効果的で、重要な位置づけをされています。私は看護師ですが、医師や管理栄養士とは多くの場で情報共有を行い、チームとして活動しているという実感はあるのですが、他職種とはなかなかチームとしての意識が薄かったように思います。今回、チーム医療が奏功した事例について体験したので紹介したいと思います。

患者さんは、1型糖尿病で、今回脳梗塞を発症し入院しました。片麻痺となった、独居で70歳代の方でした。退院のためには、インスリンの自己注射の確立が必須でした。私たち看護師は、業者からの自己注射補助具を使いなんとか確立できるように試行錯誤していましたが、あまり上手くいかない状況が続き、患者のリハビリを毎日実施している作業療法士に相談することになりました。作業療法士はインスリンを打つとはどのような動作であるのか、安全を確保するにはどうしたらよいのか、など看護師からのレクチャーを受け、患者さんと毎日練習しながら、自己注射補助具を作り上げました。大きめの洗濯バサミやトレイなど簡単な物を利用した道具でしたが、業者の補助具では確立できなかったインスリン自己注射が、実施できるようになったのです。その後、自宅訪問の際に自宅での使い勝手を確認したり、補助具を改良したり、病棟の看護師に使用方法をレクチャーしたり、インスリン自己注射の手技に関しては、作業療法士がリーダーシップをとることとなりました。メディカルソーシャルワーカーが、インスリン自己注射など薬物療法の確認をしてくれる訪問看護の手配を、配食サービスを管理栄養士が提案し、患者さんは無事退院することができました。外来通院での血糖コントロールも良好です。

その他の事例では、糖尿病教育入院した患者さんが、血糖コントロールを良好にしたいと思うあまり、病院食をほとんど食べないということがありました。看護師は「病院食は計算されている食事なのですから、きちんと食べてください」と説明しましたが、本人は納得しません。この患者さんについては、管理栄養士と看護師、薬剤師が協働して一緒に説明を行うことにしました。管理栄養士は食事内容についてくわしく説明し、看護師はその食事を摂った際の血糖値の変化について、そこで薬剤師が処方されている内服の作用について説明、皆で血糖コントロールの方法についてくわしく話しました。一緒に説明を聞いたことで、患者さんは「この薬をのんでいるのだから、今の食事は大丈夫」という思いになり、食事療法についての理解を深め、病院食も全量摂取できるようになりました。その上で、理学療法士からも運動療法について指導があり、患者さんは、前向きに療養行動を取るようになりました。

これらの事例を通して、糖尿病のチーム医療を円滑に、効果的に進めていくためには、共通の目標達成のために、双方向のコミュニケーションを図り、チームの専門職とどのように連携、協働するか、仕事内容とチーム内での役割についての相互理解を深める必要があることを実感しました。



(芳珠記念病院) 内分泌代謝疾患ワーキンググループ (DO-BEST)